

エジプト国における第三国研修

普及と試験研究をつなぐために

耕種が携わっている JICA パキスタン国バロチスタン州農業普及員能力向上プロジェクトにて、同州の普及能力を高めるべく、第三国研修を実施した。7日間の日程で、エジプト国の国際乾燥地農業研究センター(以下 ICARDA)を訪問し、節水灌漑農業をテーマに、技術普及・モニタリング、研究機関と普及の連携を学んだ。バロチスタン州(以下バ州)の農業普及局から4名、情報局から1名、研究部門の Agriculture Research Institute(以下 ARI)から1名、計6名のカウンターパート(CPs)と共に ICARDA の講師や同国の Agriculture Research Center(以下 ARC)の技術者による技術研修や受講し、またカイロ周辺の農家や農場にも訪問した。

出発前のオリエンテーションでは、対面で全 C/Ps が集まった会議は久しぶりだったためか、少し緊張した様子が見られたが、時間が経つにつれて緊張もほぐれていき、とても良い雰囲気が進めることができた。オリエンテーションの終わりには、当プロジェクト終了後、プロジェクトの研修で経験を積んだ普及員をどう活かしていくのか、その中で研究部門の ARI はどのような連携が必要なのか等、第三国研修の最終日に行う予定の議論が自然に始まり少し驚いたが、同時にこのメンバーであればこの第三国研修も有意義なものになると感じた。

第三国研修講義初日は、C/Ps の強い関心内容である、灌漑農業技術、灌漑システム管理、ICT を活用したモニタリングに関する講義等であり、講義中はエジプト国の取組事例に対して、活発な質疑応答が交わされた。講義2日目の主な内容は、同国のオリーブやサボテン栽培であった。バ州にも広く野生種のオリーブが分布しているようで、エジプト国以上にオリーブ栽培の潜在性を示す意見が出ていた点は印象的であった。一方、サボテン栽培は目新しかったようで、バ州の土壌条件の悪いエリアで栽培できる可能性を示唆する研修員もいた。研修プログラム後半の農場訪問では、点滴灌漑によるオリーブ農園やナツメヤシ育苗を見学し、また農業資材会社も

訪問した。訪問後も視察先の関係者と個人的に面会の約束をとり、ホテルでさらなる意見交換の場を設ける研修員もあり、時間の許す限り知識や情報を得ようとする姿勢は目を見張るものがあった。また、エジプト国の農業普及システムは、10年以上前から弱体化し始めたサービス体制の説明を ICARDA や農場関係者から受けた。この背景には政治的な要因があるようで、研修員達は高い関心をもって、同国の農業普及システムの変遷から教訓を得ていた。

ARC が主導となって行われた技術普及の取組が多く紹介されたこともあったのか、最終日の講師との議論では、バ州では試験研究の知見や技術が十分に農家に普及されていない可能性があるという課題が浮き彫りになった。



訪問した農園での集合写真

この課題の解決策案として、当プロジェクトの研修機会の活用、過去の普及活動や試験研究との連携改善に向けた取組の振り返り、そして今後の普及局と研究部門の連携促進などが議論された。具体的には、Rabi 期(乾季、10-4月)と Kharif 期(雨季、6-9月)の播種前に研究部門が開催している Rabi and Kharif 会議に、普及局や大学関係者なども参加してもらい、技術的、地域的な重要事項の共有や報告を行い両者の連携を進める。さらに、現場の普及課題や活用できる現場施設や人材を共有する案が上がったことは、この研修中の一つの成果ともいえる。

英語が通じる利点もあるが、C/Ps は、たった7日間で時には講師を圧倒する程の議論を交わすことができた。今後の C/Ps の新しい取組に注目しつつ、プロジェクトチームもこの研修で高まった彼らの結束をプロジェクト活動にいかしていきたい。